



医療法人 静和会

浅井病院

一人ひとりの、しあわせ。





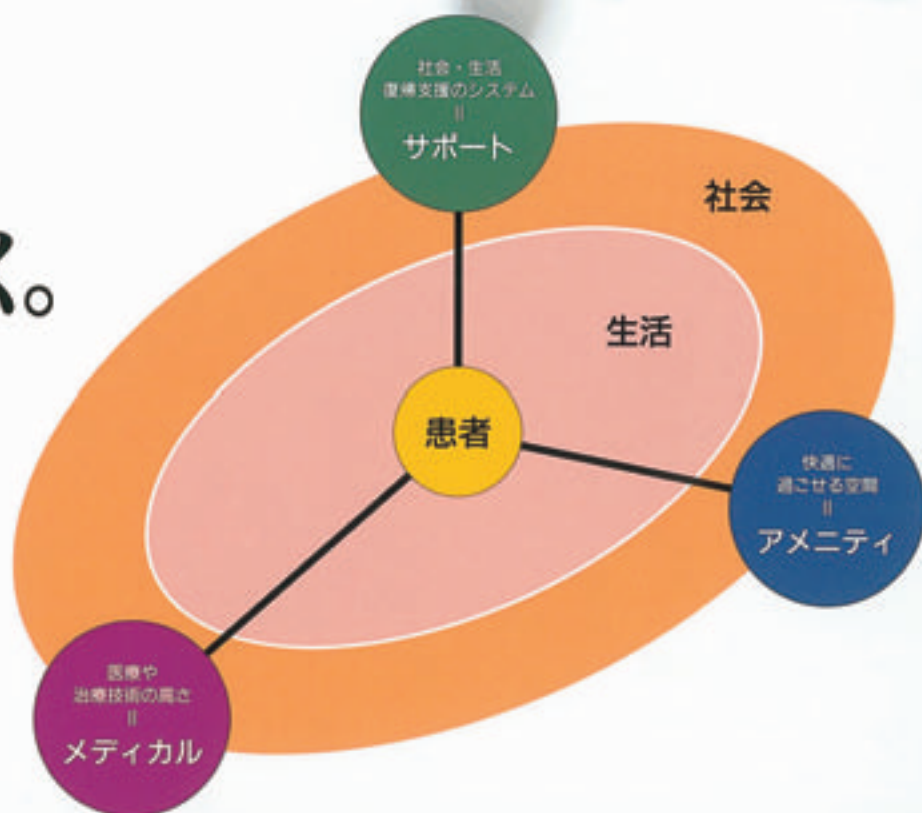
医療も、看護も、介護も、患者さん

春。院内のはんでん木が、今年も芽吹き始めています。初夏になれば、チューリップによく似た白い花が、訪れる人や入院している人たちの目を優しくなごませてくれることでしょう。この木が植えられてもう半世紀近くになりますが、木が生長する間、当院も、当院を囲む精神医療の世界も大きく変わりました。もちろんこれからも大きく変化していくに違いありません。でも、どれだけ歳月が流れても、浅井病院には変わらないことがあります。いえ変えてはいけない考え方がある、と言った方が良いでしょう。それは、『ここを訪れた患者さん一人ひとりにとって、最もふさわしい医療とは何かを、常に全員で考え実行する』ということ。

そのためにしなければならないことは、たくさんありました。まず第一に、治療に当たるスタッフ（医師や看護婦（士）、コ・メディカルなどです）の技術の向上。いわゆる『医療の質の高さ』は患者さんにとって何より大切です。第二に『快適さ』。誰も好んで病気になる人はいません。とすれば、治療や療養を余儀なくされたとき、安心して気持ち良く時間の過ごせる、明るくゆとりある施設、環境であることは、病院として欠かせない要素だと思います。そして第三には、これは決して忘れてはいけないことですが、社会生活に戻るための『支援体制やそのプログラム』をしっかりと整えることです。この三つのことに、

ごとにふさわしく。

医療技術の変化や、社会の変化のなかで、浅井病院は取り組んできました。スタッフで新しい治療方法を研究したり、治療に必要な先進機器や施設をいち早く整備したり……。最近では病棟と、デイ・ケア、リハビリテーション施設を、治療形態や患者さんの症状に合わせてはっきりと分け、目的とする治療や療養がより効果的になるようにしました。これらのことは、「一人ひとりの患者さんにふさわしく」とまず発想していたら、結果的にそうなったに過ぎません。もちろん、患者さんのためだからと、やみくもに進めてきたわけではなく、試行錯誤を繰り返しながら、



時には「エッ」と驚かれるようなことにもチャレンジして、いい結果を生み出してきたのです。私たちは、これからも今までと同じように決して急がず、ときには立ち止まって考えながら、常に患者さんとともに歩んでいこうと思っています。

ヒトと生活と社会の間に、 浅井病院の医療があります。



浅井病院の病室には格子はなく、8割が開放病棟です。精神科集中治療のための病室は6つあります。敷地外に設けられた住宅には、仕事に通っている患者さんが住んでいます。これらのことに、多くの人はずっと驚きます。従来の精神科病院のイメージとあまりに違うからでしょうか。しかし、精神の治療や療養を、ヒトと生活と社会を結んだなかで考える浅井病院では、決して不思議なことではありません。集中治療室は、緊急時にきちんと対応し(これはとても重要なことです)、その後の治療とリハビリで短期間に退院してもらうため。患者さんの住宅は、普通の生活のリズムを保ちながら、社会や家庭生活に戻ることを支援するため。病室の格子は、有る方がおかしい——。こうした結果、3ヵ月以内に7割、6ヵ月以内に8割以上の方が社会復帰しています。ヒトと生活と社会を結ぶなかで精神の治療や療養を考える、浅井病院のうれしい、そして大切な実績です。



はんでん木

治療もスタッフも施設も、 限りなく専門性を高めています。

……夜中、急に精神症状の出た患者さんが、浅井病院に運ばれてきました。

まずは外来で充分診察をします。

そのうえで、精神保健指定医という特別に認定を受けた医師が、入院が必要だと判断した場合は、精神保健法の入院手続きを行い、PICUと呼ばれる精神科集中治療室へ入ってもらいます。

そこでは専門のスタッフによって緊急の治療が素早く行われ、

必要に応じて、MRIやCTといった先進医療機器を使用します。

その後、急な症状が安定したものの、しばらくは入院して治療した方がいいと判断されれば、

今度は、「急性期病棟」での治療が始まります。もちろん、開放病棟です。

ここで浅井病院独自の、患者さんの状態像の評価基準である「看護度」に基づき、

約1週間から長い人で3週間、短期の治療と精神リハビリテーションがスタート。

症状は現在どの段階にあり、どんな看護やリハビリをすれば良いのかきめ細かく観察し、

その結果を治療に関わるスタッフ全員で検討、評価していきます。

そして「もう大丈夫」と判断されれば退院、あるいは

デイ・ケア、デイ・ナイト・ケアなど、通院しながらリハビリを受けることになるのです。

リハビリのプログラムは、

一人ひとりの希望に応じられるようたくさん用意され、話し合って決められます。

このようなひとつの例でもわかるように、

精神の病気の多くは、症状の出た初期段階での治療がとても重要です。

ここでしっかりと的確な治療をすれば、より早く元の生活、社会に戻ることができるのです。

そのためにも、浅井病院は、専門の施設・設備と、

症状と患者さんに合わせた治療を行うスタッフの充実に力を入れてきました。

当然といえば、当然のことではありますが、



医師と看護婦による申し送り



ナースステーションとPICU

毎日の治療も生活のひとつ。 ゆとりと明るさがあります。

いつでしたか、ある若い理学療法士が、こんなことを言いました。

「アメニティって、患者さんの人生を丸ごと見つめて、

一番快適な環境を創ってあげることなんですわね」。

そこに居合わせた医師や看護婦のみんなが頷きました——。

私たちの病院には、先にお話したケースのような人もいれば、現在の医学では、
どう手当てを尽くしても、社会に復帰することが困難な状態になってしまった患者さんもいます。
症状の現れ方が異なっているのに、同じ病棟と一緒に入院しているのは、どこか変だと思えます。

そこで私たちは、治療する方法の違いによって病棟を分けました。その方が

患者さんにとってはもちろん、私たちにとっても一人ひとりをよく看ることができるからです。

次に、病院は生活の場でもあるのだから、病室を快適にするのは当たり前だとも考え、

採光を明るくしたり、一人あたりのベッド・サイド面積を広くしたりしたのです。

またなかには、忙しい社会生活によってストレスを抱えた人が、短期間、

休息入院するというケースもあり、そういう人がゆったりと静養できる病棟も作りました。

ちなみに1994年にオープンした新しい病棟(第8病棟と呼んでいます)は、

2人部屋が18室、バス・トイレ・TV付きの個室が11室、PICUが3床で構成されています。

患者さんは自由に院内を、症状が軽い場合は院外にも出かけられます。

逆に、外来の人の診察は個室で行うなど、プライバシー面の配慮も忘れていません。

その一方で、痴呆などにより誰かの手を借りなくては生活が困難になったお年寄りや、

そのお世話をしていられるご家族のために、

病院の近くに老人保健施設「老人ケアセンター浅井」も用意しています。

こうしてみると、「環境」と「治療」とは密接な関係にあることが理解いただけるはず。

これからもこの両方をもっと充実させようと、浅井病院ではみんなでお話し合っています。



院内、梅林と池のほとり



広く明るい共有スペース

社会への復帰のために、地域とともに、一人ひとりのプログラムを作ります。

浅井病院の朝はにぎやかです。

外来棟には、歯を押さえた小学生。マスクをしたおばあちゃんは風邪でしょうか。

やや緊張気味のサラリーマンは、初めての人間ドックかもしれません。

玄関に着いた送迎バスからは、それぞれの家庭から

デイ・ケア、デイ・ナイト・ケアのためにやってきた患者さんたちが降りてきました。

病院のすぐ近くにある援護寮「ゆりの木荘」では、ケアに出かける18名の入寮者が、

自分たちで作った朝ごはんをおいしそうに食べています。

共同住宅「ところ荘」(千葉県で最初のグループホームです)では、7名の入所者が食事を終え、職親やパートの仕事へ出かけました――。

このように、浅井病院は入院患者だけの病院ではありません。

通院でケアを受けたり、自立をめざし社会との接点を持ったり、

また内科や歯科の診療を受けに地域の人々が訪れたり、

地域に溶け込み、開かれた病院なのです。

地域に溶け込む、地域に開かれる、これはとても大切だと思います。

なぜなら私たちは、患者さん一人ひとりにふさわしいリハビリテーション・プログラムと、

そのサポート・システムの提供には自信があるし、また、精神的な病いを持つ人や回復した人、

そしてその家族に対して必要なサービスを選択し、またそのサービスの紹介・斡旋を地域ぐるみで

支援しようという考え方、「ケースマネジメント」に、日本でもいち早く取り組んでいます。

それもこれもすべて、地域の皆さんからの理解と具体的な支援があるからこそ、できていること。

地域のなか＝社会のなかで、精神科医療を進めている浅井病院なのです。そうした歴史が半世紀。

今では、社会復帰へ向けたリハビリテーションも、点ではなく面にまで広げていきたい、

そんな夢を追い始めました。



リハビリテーションでの活動



外来受付

浅井病院 NOW

浅井病院の
ほんの一コマに過ぎませんが、
ご紹介します。

日当たりも自慢のひとつ。 新病棟(第8病棟)です。

2階、3階が急性期・短期の治療病棟、
1階はリハビリ棟です。円筒形の部分は、
ホール。デイ・ケア、リハビリ活動、職
員の研修会にも使われます。



第8病棟

緊急を要する 患者さんのためのPICU (精神科集中治療室)

8室のPICUはナースステーションに
隣接し、安心して治療を受けられます。
PICUは、全国でも数少なく、新しい
短期治療病室です。



PICU

「健診センター」。広く地元の 人々が活用しています。

内科・歯科に加え、この最新の脳ドック
も含めた人間ドックが新たにオープンし
たことで、地域の中核病院としてさらに
貢献していきます。



健診センター

地域での生活をサポートする 援護寮「ゆりの木荘」。

居室は1人部屋7室、2人部屋7室で構
成されています。日々の運営は施設長1
名、生活指導員3名が関わっていますが、
入寮者による積極的な話し合いでの自治
活動が中心です。



採光の大きな明るい室内

老人ケアセンター浅井

ゆとりをもった家庭的な環境で、介護、リ
ハビリテーションを必要とするお年寄り
(特に偏楽の方々)の皆さんを対象に、入所
サービスと在宅支援サービスを行っています。
入所サービスでは、医療・看護・介護
・リハビリの提供を行っています。また在
宅支援サービスでは、デイ・ケア、ナイト
・ケア、ショートステイ(短期入所)により、
あたたかい老人ケア、家庭介護の支援をい
たします。



老人ケアセンター浅井



仲間と一緒に機能訓練

浅井病院のあらまし

所在地 千葉県東金市家徳38-1
TEL:(0475)58-5000
FAX:(0475)58-5549

理事長 浅井利勇
院長 浅井邦彦
副院長 秀野武彦
老健施設長 浅井達也
開設日 昭和21年10月1日 病院開設
昭和34年10月9日 病院開設

診療科目 精神科、神経内科、内科、歯科、
人間ドック(脳ドック・成人病
ドック)、精神科デイ・ケア、
精神科デイ・ナイト・ケア、
精神科作業療法、理学療法

病床数 475床 精神科 388床
うち精神科療養(A)42床
内科 87床
うち療養型病床群42床

看護基準 新看護体制
精神科 3.5:1看護
10:1看護補助
内科 3:1看護
10:1看護補助

医師 常勤14名
うち精神保健指定医10名
他歯科医師2名

非常勤7名
うち精神保健指定医4名
他歯科医師2名

看護職員 192名
敷地面積 22,344坪(73,736.5㎡)
建物 4,438.6坪(14,647.5㎡)

主な設備 MRI(磁気共鳴コンピュータ断
層撮影装置)、CTスキャン(全
身)、X線透視装置、移動型X線
装置、歯科パノラマX線装置、
眼底カメラ装置、脳波測定装置、
心電計、超音波診断装置、胃カ
メラ、薬剤自動分注機、薬物血
中濃度測定装置、血液凝固測定
装置、生化学自動分析装置

主な施設 デイ・ケア施設、デイ・ナイト
・ケア施設、精神科リハビリテ
ーション施設、運動場、屋内プ
ール、テニスコート、野球場、機
能訓練室、弓道場、保育所、保
養所、グループホーム「ところ
荘」、援護寮「ゆりの木荘」

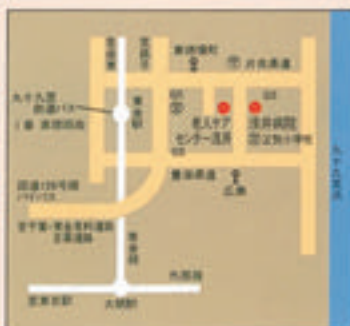
関連施設 老人ケアセンター浅井(100床)
痴呆専門病棟50床
デイ・ケア、ナイト・ケア
(70名定員)



(交通)

●電車の場合
JR東金線東金駅下車、九十九里鉄道バス
(1番線に乗車し家徳(かどく)下車。東金
駅よりタクシーで約10分。外房線大網駅
よりタクシーで約20分。

●自動車の場合
国道126号線と片貝原道の交叉点(増上)を
九十九里方面へ右折、約2.5kmに病院入口
看板有。



医療法人 静和会

浅井病院

〒283 千葉県東金市家徳38-1
TEL:(0475)58-5000
FAX:(0475)58-5549

老人ケアセンター浅井

〒283 千葉県東金市家徳157-1
TEL:(0475)58-6781
FAX:(0475)58-8213

企画・制作/東江事務所